星槎大学機関リポジトリ

論文種別	追悼特集
タイトル	大野精一先生の学校教育界における軌跡 －学校教育相談に関する学術的功績・社会的貢献－
Title	
著者	藤原　忠雄
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	*Seisa University Research Studies in Education*
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 55-57
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000296/

追悼特集

大野精一先生の学校教育界における軌跡
－学校教育相談に関する学術的功績・社会的貢献－

藤原　忠雄[a]
（兵庫教育大学大学院）

はじめに

日本の学校教育界において、御尽力された大野精一先生が令和 3 年 10 月 21 日に急逝された。御冥福を心よりお祈り申し上げる。本稿では、大野先生（以下「大野」と略記）の数多くの学術的功績・社会的貢献の中から学校教育相談に焦点を当て、学校教育相談の理論化、学校教育相談実践の国際化の 2 点を取り上げる。

1.　学校教育相談の理論化

大野は、1980 年代後半から学校教育相談の定着化の検討を始め（大野, 1990）、その不定着は学校教育相談の実践上の枠組みの不明確さ、実践を支える理論の不確立が大きな要因であることに行き着いた。そして、1990 年代に入り定着化に不可欠である理論構築に着手した（大野, 1996）。これが大野の「学校教育相談の理論化」である。ここで言う理論化とは、学校教育相談の概念規定の検討であり、学校教育相談の現実に取り組まれている実践を意味付け、将来を展望するために必要な全体的体系的枠組みの提案である（大野, 1997）。

この理論化の作業は、学校教育相談の暫定的概念規定（大野, 1996 ; 1997）及び試論的概念規定（大野, 1998）の発信後も検討を重ねながら、2011 年に発生した東日本大震災の被災地支援の経験を踏まえた最終的概念規定（大野, 2013）[注)] の発信まで継続した。

この理論化の必然性の背景に、それまでの学校教育相談では専門性の担保が必要である心理療法等に偏った方法論や、具体的活動に結びつかない精神論などが展開され、その実践を日常的な教育活動として一般化することの視点が弱かったことが挙げられる。そのため、この理論化により学校教育相談に全体性・体系性・包括性を担保した枠組みを提供できた意義は大きく、学校教育相談実践を一般化し定着化させるための大きな一歩となった。

この理論化の発信を契機に、全国で学校教育相談の在り方に関する議論が深化・活発化するとともに、関連学会等にも大きな影響を与えた（藤原, 2018, pp.14-17）。日本学校教育相談学会は、大野が暫定的概念規定を発信した 1996 年の年次大会において学校教育相談

---

[a] 兵庫教育大学大学院学校教育学研究科教授

の理論化に取り組むことを決議し、理論化準備委員会（1999 年理論化委員会と改称）を設置し、2005 年大会まで検討を重ねた。そして、学会の概念規定「教師が児童生徒最優先の姿勢に徹し、児童生徒の健全な成長･発達を目指し、的確に指導･支援すること」（日本学校教育相談学会, 2006, p.17）を初めて発信した。相違点は、大野は「学校教育相談（School Counseling Services by Teachers in Japan）」という固有性をもつ語として定義したことである。また、日本生徒指導学会も、学校教育相談と同様に理論不整備が指摘されていた生徒指導の概念規定に着手した。このように、我が国の子ども支援の関連学会に大きな影響を与えた。

2.　学校教育相談実践の国際化

大野（1997）の理論化は、佐伯（1986, pp.6-11）の展望論文に関する提言に従い、タテ糸は過去から未来に向けての実践研究の歴史的流れ、ヨコ糸は異なる分野での同じような考え方・理論・モデル・主張、ナナメ糸は各々の時代の各々の考え方に対する批判の流れを設定して行われた。具体的には、タテ糸にそれまでの学校教育相談実践の理論的総括による類型化、ヨコ糸に関連する学問領域（学校カウンセリング、学校心理学、学生相談）及び諸外国のスクールカウンセラーの実情を設定した。その諸外国の現状は、アメリカに関しては文献、スウェーデンとオーストリアに関しては自らの視察に基づき検討している。こうした諸外国の実践から理論化のヒントを得るという作業を通して、その必要性・継続性を確信した大野は、以下のような学校教育相談実践の進展と国際化を目指した活動を展開した。

大野は、日本学校教育相談学会の調査研究委員会委員長として、アメリカスクールカウンセラー協会（American School Counselor Association ; 以下「ASCA」と略記）の前会長（当時）ジャン・ギャラガー（Jan Gallagher）氏を招聘し、情報交換とともに協働関係構築を実現した。これが、ASCA をモデルにした学校教育相談ナショナル・スタンダードの作成、ASCA の年次総会での共同発表に結びつくことになった（大野他, 2002）。

また、日本学校教育相談理論化研究会の主宰として、2004 年に香港特別行政区教育局の生徒指導部門主席調査官（当時）であるブライアン・リー（Bryan Lee）氏との連携・協働による香港教育視察を実施した。これが、東アジア（儒教文化圏）との交流・連携の道筋をつけることになった。そして、学校心理士認定運営機構（2010）が企画した海外研修の団長として、学校心理学のリアリティとアクチュアリティの追求を目的にした香港・台湾視察に繋がった。このように、国際的視野に立ち子ども支援の在り方を検討し続けた。

おわりに

上述した 2 点以外にも、大野（2019）など教育雑誌を通じた社会への継続的な話題提供

や議論の発信等もある。学校教育相談以外にも日本版学校心理学の発信に係る共同研究、学校心理士の資格制度設計及び発展牽引、公認心理師の資格誕生への参画、被災地支援（東日本大震災、熊本地震）への積極的関与等々、大野の功績・貢献は枚挙にいとまがない。

＜注＞

学校教育相談とは、児童生徒の学習面（広く学業面を含む）、進路面（針路面を含む）、生活面（心理社会面および健康面）の課題や問題、論題に対して、情緒的のみならず情報的･評価的･道具的にもサポートをするため、実践家に共通の『軽快なフットワーク、綿密なネットワーク、そして少々のヘッドワーク』を活動のモットーに、『反省的（省察的）実践家としての教師』というアイデンティティの下で、1）参加的な観察を中核とする統合的なアセスメントにより子どもたちを理解してみまもり（見守る）、2）すべての子どもが持っている創造力（クリエイティビティ）と自己回復力（レジリエンス）とにていねいにかかわり（「関わる」とは、狭義のカウンセリングのみではなく、構成的グループ・エンカウンターやソーシャル･スキル･トレーニング等の心理教育を含め、さらに、そうした直接的なかかわりをチームとして支える作戦会議等をいう）、3）早急な対応が必要な一部の子どもとしのぎ（「凌ぐ」とは、危機介入や論理療法等も含む初期対応等をいう）、4）問題等が顕在化している特定の子どもをつなげ（「繋げる」とは、学校内外の機関等との作戦会議を土台とする連携･協働等をいう）、5）すべての子どもがこれからの人生を豊かに生き抜くために、もっと逞しく成長･発達し、社会に向かって巣立っていけるように、学校という時空間をたがやす（「耕す」とは、学校づくりのことをいう）、教育相談コーディネーター教師（特別支援教育コーディネーターを包含する）を中核とするチームによる組織的系統的な指導･援助活動（支援活動）である。

引用文献

藤原 忠雄（2018）．暫定的概念規定の意義　大野精一・藤原忠雄（編著）　学校教育相談の理論と実践　あいり出版

学校心理士認定運営機構（2010）．第 9 回海外研修 2010 年香港・台湾スクールカウンセリング研修旅行報告書－学校現場・大学・行政の三者間連携を模索する

日本学校教育相談学会（2006）．学校教育相談学ハンドブック　ほんの森出版

大野 精一（1990）．教育相談定着化のために何が必要か－「学校は生活共同体」という視点から　月刊学校教育相談　学事出版　1990 年 8 月号　pp.26-29.

大野 精一（1996）．学校教育相談－理論化の試み　ほんの森出版

大野 精一（1997）．学校教育相談とは何か　カウンセリング研究, *30*, 160-179.

大野 精一（1998）．学校教育相談の定義について　教育心理学年報, *37*, 153-159.

大野 精一・Gallagher, J.･西山久子･八並光俊･新福知子･金山健一･竹本克己･菊地まり･佐藤一也･藤原一夫（2002）．ASCA との連携・協働に向けて　学校教育相談研究, *12*, 61-109.

大野 精一（2013）．学校心理士としてのアイデンティティを求めて－教育相談コーディネーターという視点から－　日本学校心理士会年報, *5*, 39-46.

大野 精一（2019）．時評 1994 年 4 月－2006 年 3 月　日本学校教育相談理論化研究会

佐伯 胖（1986）．認知科学の方法　認知科学選書 10　東京大学出版会